

琉球大学学術リポジトリ

ヒカンザクラ種子の発芽と育苗

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲宗根, 平男, Nakasone, Hirao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21292

ヒカンザクラ種子の発芽と育苗

1. ま え が き

沖縄唯一のサクラ、緋寒サクラの花も一せいに咲き、一せいに散り、そろそろサクランボが出来る季節となった。4月中旬から下旬へかけて暗紫色の果実となって落下する。その種子1個、1個が将来の大木となり、花を咲かせて、吾々の目を楽のしませてくれる。

昨年6月号に「ヒカンザクラ種子の発芽促進」について記したが、その後実験室、苗畑での試験継続の結果、新しい事実が判明したので公表し、サクラ愛好者へ参考に供したい。



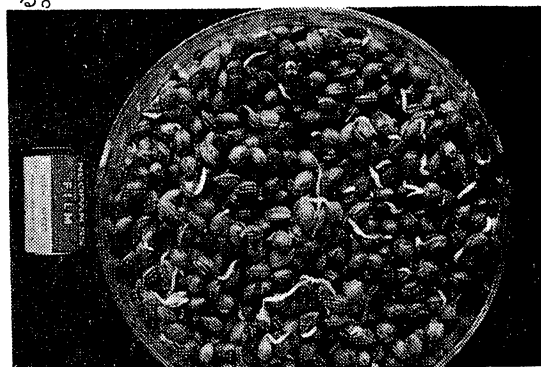
サクラの満開した名護城

2. 種子の発芽適温

昨年4月末与那演習林にて採取した種子を、温度別発芽試験を行なった結果は次の通りである。

温度 °C	供試粒数	発芽数	発芽率 (%)	摘 要
7~8	500	400	80	冷蔵庫下段 7~8°C使用, 期間2ヶ月
20	"	10	0.2	防空壕使用, 期間 同
25~30	"	0	0	室温, 期間 同

以上の結果から、種子の発芽適温は10度以下であり、沖縄産樹木種子中稀有のものと考えられる。



シャーレ中で発芽したサクラの種子

3. 種子成分の変化

冷蔵庫貯蔵種子(7~8°C, 6ヶ月貯蔵), 20°, 52°~30°(発芽試験供試種子)発芽直後種子の成分分析結果は下の通りである。

成分	温度 7~8° (%)	20° (%)	25~30° (%)	発芽直後
澱粉	9.4	8.8	7.5	7.1
油脂	47.8	45.0	40.1	36.2
蛋白	23.2	23.3	23.2	23.1

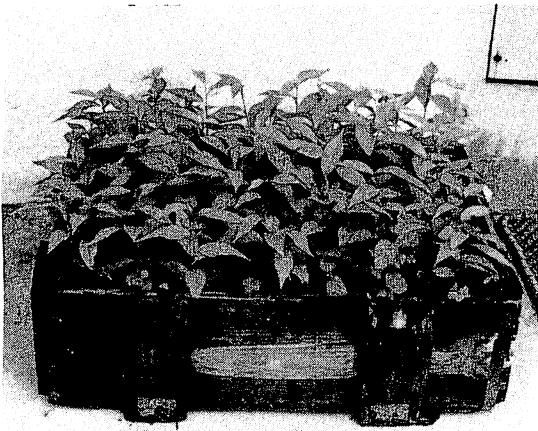
上表から発芽に要する主要成分は、澱粉、油脂類で、蛋白には殆んど変化が見られない。温度が高くなるにつれて、主要成分が減少し、発芽に必要な成分不足が発芽率に大きく影響していることが判る。

4. 直播不成功の理由

従来行なわれている直播不成功については、上記実験から明らかなように4月下旬頃直播すると、その後の気温は上昇し、25～30°となり、10月頃から下降し、翌年1～2月頃に10°以下の気温となる。成分変化のはげしい温度に長期間さらされる結果となり、発芽適温になった場合には、殆んど発芽に必要な成分が消耗されている有様である。その為天然生苗も得難い。サクラ増殖の第一歩は、種子発芽を人工的に助ける必要を痛感された事と思う。

5. 発芽直後種子の取扱い

発芽直後の種子は、鉢、播種箱、苗床へ植付けする。これらの種子は殆んど芽出しを行ない、月平均10cm程度の生育をする。即ちこの種子は発芽温度は低いが、生育温度は割合に高く、巾を持っていると云える。



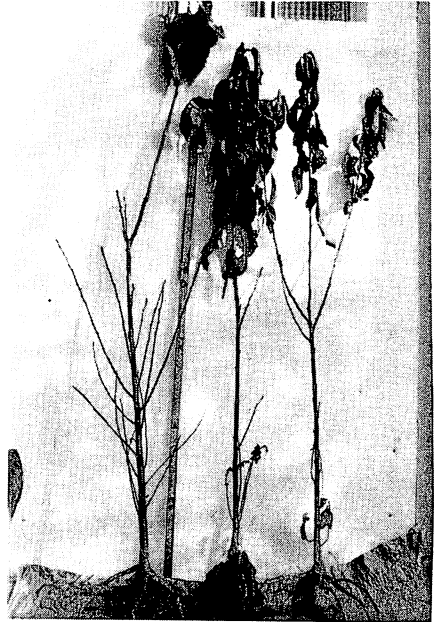
播種箱で生育中の苗

6. 床替畑での生育

昨年3月始め発芽促進法で育成した幼苗を、与那演習林苗畑へ床替し、11月末に測定した結果は下の通りである。

処理 期間	植付 本数	活着 本数	活着率 (%)	根本径 平均cm	苗高平 均cm	摘 要
週間						
1	108	71	65.7	1.20	75.6	根本径1cm 苗高70cm 以上 340本 (78.5%)
2	176	92	52.3	1.11	76.4	
3	144	85	71.4	1.23	87.8	
4	200	95	47.5	1.24	98.9	
5	200	89	44.5	1.28	101.9	
計	828	432	52.2	1.21	88.3	

植付前に基肥として鶏糞少々を施し、床作り後15cm間隔、日覆なしで床替を行なった。時々灌水、除草、施肥(硫安少々)を行なった。植付当初の幼苗は10cm内外、9ヶ月後その80(%)近くが本植用として使用出来る苗となった。



養成した1年生苗後方対称物は1メートルの折尺

7. 一年生苗の定植

1m内外の苗木は、土付で植木市、名護桜祭などで販売されているが、落葉期(12～1月)の寒冷季節には土なしでよく活着する。

苗木の掘取りは、根の乾燥を防ぐため、赤土粘土(水で練ったドロドロの粘土)を付着させ、古新聞、こもで包装するだけで十分である。

新葉が出た後での移植は、灌水を十分に行なえば活着はよいが、本幹の先端は枯死し、側芽(根際からの芽)がこれに変る場合が多い。遅植えの場合は、側芽を再生させた方が生育は良好のようである。

8. 実施方法

種子は4月中に暗紫色となり落下する。採集後よく水洗いし、果肉を除き、1昼夜水浸し、シャレー(ふた付)かビニール袋に少々の水を与えて、家庭用冷蔵庫下段へ入れる。約1ヶ月後発芽して

くるので、その間時々水を与え（低温中は乾燥し易い）、湿度を保つ必要がある。

発芽した種子は、芽の長さ 5 mm 内外の時播種箱、苗床へ植付し、10cm 内外に生長後、15～20cm 間隔で苗畑に床替を行なう。その後灌水、除草、施肥などの手入れを行なえば、年内に 1 m 内外の苗木養成も可能である。

9. 種子の貯蔵

苗畑などの都合により、種子保存の必要が生じた場合は、水洗後、蔭干しにし、水気を切ってビニール袋へ詰め、冷蔵庫貯蔵を行なう。室温にての夏越し種子は、発芽力を失なうので注意が肝要である。保存種子は11～12月頃に、苗畑へ直播すれば、翌年 1～2 月頃に発芽し、予定の苗木養成も出来る。

10. む す び

従来サクラ苗木養成は困難で、専門家の間でも出来、不出来があり、また長期間を要していた。この実験結果により、確実に短期間で、目的の苗を作る事が出来る。

サクラは観光、レジャーなど、人間生活に安らぎを与えてくれる最適の樹木であり、美しい花である。適地も広く公園、庭園、校庭など近い将来千本楼の名園も夢ではないようである。

林学科屋我嗣良講師、比嘉正男 4 年次学生、与那演習林勤務岸本文男、比嘉達弘氏らと共に 3 年来の共同作として、一応おすすめし、今後接木、品種改良など見事な花を作り出す努力をした
い。
(仲宗根平男)